

FBM 実践セミナー「家族の歴史と心理学（ジェノグラム分析の実践）」

2020/11/7 実施

講師紹介・セミナー概要：

小川敬先生は家系図の制作会社に所属しながらファミリーアイデンティティの構築を目指して、家族史（ファミリーヒストリー）の再作と研究をこれまで29年続けられてきました。

今回は、その家族心理学、家族システム理論やジェノグラム分析の研究より、いかにしてクライアント企業の家族関係を見える化して、問題解決に導くのかについて、ご講演頂きました。

セミナー詳細(時系列)：

1. 小川先生の自己紹介、会社紹介

- ・小川先生書籍「ハッピーセラピー 読むだけで悩みが解ける家系学」

<https://amzn.to/2JJ23sN>

- ・苗字検索サイト「写録宝夢巢（シャーロックホームズ）」のご紹介

<https://www2.nipponsoft.co.jp/bldoko/>

2. 家系図分析から見えてきたこと

- ・ 家系図を調べることで家族のアイデンティティ（特徴、傾向）が分かる。
- ・ 子供は母方の母の家族の影響を受けやすい。
- ・ 男性側は人生の舞台で、女性側がシナリオ（脚本）を持ってくる。夫婦は似たような家族パターン（問題や特徴）を抱えていることが多い。
- ・ 家族において問題がないことはない。問題がないことを前提にすると、むしろ問題が生じる。問題を見つめて、家族みんなで学ぶことが大切。

3. 戸籍取得方法について

- ・ 明治5年式戸籍は身分などが記載されているので閲覧できなくなっている。
- ・ 明治19年式は取得できる。幕末ぐらい（150～180年前）。しかし、戸籍は保管期間が過ぎると破棄される。
- ・ 明治31年式。家制度に基づく戸籍⇒戸主が絶対的な権力がある。
- ・ 戦後、大きく戸籍制度が変わる。昭和23年式⇒個人の自由が保障されたもの。核家族。
- ・ 平成6年式でシステム化される。（現在）
- ・ 明治以前をのぼるには過去帳（寺）、お墓を頼りにする必要がある。

4. お墓まいりによって救われた娘の事例

- ・ うつ病になった娘（IP：家族中で問題を抱えた人）が先祖を参りをすることで元気になっていった事例。
- ・ これまで条件付き（勉強ができるからいい、仕事ができるからいい、美人だからいい）でほめられていた娘は、そのことに負担感を感じて、最終的に思いつめ、うつ病になってしまった。
- ・ しかし、お墓参りをして、自分の存在が奇跡的なつながりによる結果だと理解して、生きているだけで良いということにふっきれるきっかけになった。
- ・ 生まれてきたことにただただ感謝すること。

5. 家紋について

- ・ 剣片喰（三つ葉のクローバー）：生命力、繁殖力、剣は分別・浄化の意味。
- ・ 三柏：神仏への礼節、世代交代を意味する、事業承継のシンボル。
- ・ 下り藤：子孫繁栄、藤原家の家紋。

6. 安倍晋三、麻生太郎、武豊の家系図

- ・ 母方の力量が子供に出ることが多い。
- ・ 家が栄えるかは母親の力は大きい。

7. ビル・クリントンのセックス依存症の事例

- ・ ビルの母親は未婚の母。父親は不倫しては離婚を繰り返していた。父はセックス依存症。
- ・ ビルは母方の親に預けられるが、祖父が麻薬中毒。
- ・ 母が再婚したが相手はアルコール依存症。
- ・ ビル・クリントンの依存症は、親や祖父による。子供は親の性質を受け継ぎやすい。これを「脚本（家族のパターン）」と呼ぶ。

[参考] ウキペディアによるビル・クリントンの生い立ち。

1946年8月19日にアーカンソー州ホープに誕生する。

ビルが生まれる約3ヵ月前に自動車事故で死去した父ウィリアム・ジェファースン・ブライス・ジュニア（William Jefferson Blythe, Jr.）と同じ名を与えられ、ウィリアム・ジェファースン・ブライス3世と呼ばれた。ビルが生まれた後、母のヴァージニア・キャシディ・ブライスは、看護師の勉強のためニューオーリンズへと移り、ビルは4歳になるまでホープにある母方の祖父母のもとで育つ。

1950年、ニューオーリンズから戻った母が自動車販売店を営むロジャー・クリントンと再婚し、義父、母と3人で暮らし始めた。

1953年、一家は同州ホットスプリングスへ移り住む。義父は強度のアルコール中毒であり、自宅内で頻繁に暴力を振るった。

ビルが小学生の頃、酒に酔った義父が発砲した弾丸がビルの耳元をかすめる事件がおきるなど不遇の少年時代であった。

1956年には異父弟のロジャー・キャシディ・クリントンが誕生する。その後ビルは自ら姓をブライスからクリントンへ正式に改めている。

8. 不登校になった子供の事例

- (1) 女性（大阪大正区在住）からの夫と離婚したいという相談。
- (2) 夫は職を変えがち。孤独を感じている。夫に家族のことを聞くと、夫は未婚の母の子供であり、夫も以前より孤独であることが判明。夫は父のことを知らない。
- (3) 父方の祖母がなくなり、それをきっかけに次男が不登校になった。次男は IP である。
- (4) そのことを母親が夫に相談すると夫がへそを曲げる。夫婦の会話が成り立たなくなり、別居が始まる。
- (5) 父親もその上の世代に影響を受ける。それは父親のインナーファミリーである。子供において、最初の子供は父親のインナーファミリーに影響を受けやすい。つまり、最初の子供に問題が生じると、父親のインナーファミリーに問題があることが多い。
- (6) 2 番目の子供は母親の原家族から受け取るインナーファミリーの影響を受けやすい。今回は次男の問題なので、母方に解決のヒントがある？
- (7) 母親のインナーファミリーを探るために、母親の家族関係（歴史）を聞いてみる。
- (8) 母親の祖父が短命で、父親が早くに家を出たことが判明した。
一緒に図面（ジェノグラム）を書いていくと、問題が見えてくる。母親の父親と夫が似ていることに自ら気付く。
- (9) 母（2 番目）なので、母方も聞くと、母方の祖父も孤独であることが分かった。母方の母親がずっと孤独になっていることが判明した。
- (10) 相談者は夫の方に問題があると思ったが、自分の方にも問題があると気付く。母方の問題構造を「脚本」と呼ぶ。
- (11) 始めは夫が悪いと言っていた相談者と夫と話し合うことで、夫の方が改心するようになった。
- (12) 夫には自分の中に答えがあると伝え、自分の親との関係を見つめなおすことを伝える。
- (13) そこに向き合うことが重要。
- (14) 相談者の家族に、夫が会いに行き、その中で相談者が家族に大切にされていることを理解し、夫が涙することに。自分の都合の良い妻になってほしいという考えがあったことに気付く。
- (15) 妻と一緒に、夫の実の父親を探しに行ったが亡くなっていた。しかし、それらの活動を通じて、家族関係が良い方向に向かい、不登校になっていた子供が通学するようになった。

9. IP (Identified Patient: 症状や問題を抱えた家族) の事例

- ・ IP は家族システムの不具合を教える存在である。
 - ・ 子供は理想の父・母を求めている。理想とは立派ということではなく、人間としてどうか。誠実かどうか。
 - ・ その理想と、実態の父・母とギャップがあると、負のエネルギーが溜まり、しんどくなる。生まれてきて良かったという気持ちを持てなくなり、IP となる。
 - ・ 親子関係として、親は子供を信じることができるか、子供は感謝できるかが大切。
- (1) 子供が父親を金属バットで殴ろうとするような問題児。
 - (2) 父親の家族を振り返ると、実の父親は事故で幼少期に亡くなっていた。ショックなのは母親がすぐに再婚したこと。
 - (3) 再婚相手が実の父親のことを悪くいう。そのため、再婚相手を憎んで、実は殺したいと思っていた。つまり、父は自分も母親の再婚相手との関係が未完了であった。
 - (4) 相談者の母親について調べてみると、その母親も実の母が早く亡くなり、後妻と暮らしていたが、うまくいわずに縁を切っていた。
 - (5) 相談者の母親において、夫と同じ未完了な問題があり、夫との出会いは、その問題と向き合うきっかけとなった。(家族転移)
 - (6) そのような問題が未完了であるために、子供が IP となった。

10. ゴーストロールの事例(ディズニー映画「リメンバーミー」)

- ・ ゴーストロールとは、失われたものを補う役割で、完璧な家族はないために、必ず現れる。
- ・ 努力しようとか、学ぼうとする姿勢が大切で、そのときに出てくる役割を持った人をゴーストロールと言う。

[参考]ディズニー映画「リメンバーミー」

小川さんの紹介を受けてこちらの映画を見ましたが、家族問題を解決していくストーリーでなかなか面白かったです。ご参考に。

<https://amzn.to/2GEC1Wt>

11. 家系図からの分析する視点

- ・ 家族は3代（自分、親、子供）で1つのシステムと見ることができる。
- ・ 上2世代（自分と親世代）が原家族で、その構造（パターン）が子供に影響を与える。原家族はインナーファミリーとも呼ぶ。
- ・ 原家族がその家族のパターンとなる。別の言葉では、原本、脚本、インナーファミリー、家風、情動問題、EF（エモーショナルファンクション）などと表現されている。そのパターンが子供に現れる。子供に見られる影響を写本と呼ぶ。
- ・ 子供は親の心の鏡である（鏡の法則）。子供に自分が写る。子供と向き合うことで現れる気持ちがそれが自分のインナーファミリー（原家族）である。
- ・ 母親の母方のシナリオ（脚本）が重要。脚本とは、兄弟関係、親子関係、会話のパターン、嫁姑問題、お金への執着など。
- ・ 家族に生じる問題は個人の問題ではなく、家族全体の問題と捉えることが重要。つまり、システム的な問題である事を理解すること。
- ・ 子供において、最初の子供は父親のインナーファミリー（原家族）に影響を受けやすい。つまり、最初の子供に問題が生じると、父親のインナーファミリー（原家族）に問題があることが多い。
- ・ 1番目はリーダー的で表面的な問題に気付きやすい。
- ・ 2番目の子供は母親の原家族から受け取るインナーファミリーの影響を受けやすい。また、情緒的なところに気付くことも多く、家族の根本的な問題をメッセージとして発することもある。
- ・ 3番目以降の子供は原家族の影響を受けにくい。夫婦の絶妙なバランスにつながると言われている。父親と母親の共通のテーマが現れるという。4番目は原家族を含める家族全体を表すと言われている。
- ・ ジェンダー（性別）の影響も受けるので、男の子は父親、女の子は母親の影響を受けるので、総合的に見ていく必要がある。
- ・ 問題（不登校など）を持った子供はIPで家族全体に問題が生じていることを伝えるメッセンジャーである。子供個人に問題があるわけではない。
- ・ 家族において問題がないことはない。問題がないことを前提にすると、むしろ問題が生じる。問題を見つめて、家族みんなで学ぶことが大切で、良い家族は問題に向き合える家族である。
- ・ 例えば、夫が妻を尊敬できるかは自分の親世帯の影響を受けやすい。そこを見つめて、問題に気づき、考えを改めることで分化（成長）していく。

12. 問題解決の視点(ジェノグラムカウンセリングの醍醐味)

- ・ 家族内で未解決の課題、未完了な問題がある。それを脚本と呼んでいる。
- ・ 脚本＝氷点、触れられたくない問題。凍り付いた問題を溶かしていくことが家族のテーマ。
- ・ 溶かしていくためのプロセスとして、①兄弟関係 ②夫婦関係 ③子供と向き合うことが大切。
- ・ ①兄弟で向き合う必要性は、同じ原家族の影響を受けているので、それに向き合う必要があるため。

13. コンサルタントがジェノグラム分析を進めていく上で必要な視点

- ・ 家族に問題（不登校など）が出てきてもコンサルタントは焦ってはいけない。家族が復元しようとしていると温かく見守る必要がある。
- ・ クライアントと一緒にジェノグラム分析を実施する。
- ・ ジェノグラムは柔らかく、ゲーム感覚で家族関係を見ることができるのが良い。
- ・ そのなかでクライアントに気付いてもらうことが大切。
- ・ 図面にして、一緒に確認することで、問題が見えてくる。
- ・ 急がない、相手が受け入れる準備がなければ、待つことも大切。
- ・ 仮に母親に問題があっても、それを直接指摘すると、反発を食らうので、母親に「インナーファミリーとは原家族のことを意味するが、自分の家族関係はどうか。自分の親子関係等を考えたことがあるか。」と遠回りに聞いてみる。
- ・ コンサルタント自体に家族問題を抱えていると、クライアントのその問題に向き合えない。ともに学ぶ姿勢が大切。

以上